

## [論文]

# 「見たくないものは見ない」ことによる 責任回避の構造について

魚谷 雅広<sup>※</sup>

## 要旨

「見たいもの（聞きたいもの）だけが見える（聞こえる）」、または「見たくないもの（聞きたくないもの）は見えない（聞こえない）」ゆえに、ある事柄・事象の存在が無視された結果、その存在が感じられず、またそのための思考不能によって、これまで甚大な被害が生じ、継続されてきた。重大な事件や事故があったとき、それに関して関心を持ち、そして倫理的行動へといたるには、まずそうした事象を私たちが認知する必要があるのだが、そうした事象が曲解されて伝達されたり、あるいは思考の外部へと追いやられたりと、結果として問題が解決しないこともしばしばである。

本稿は以上のことを踏まえ、まずは「どのようにふるまうか」という倫理的行動の前提となる、事象の存在を認識するうえでの必要な情報の「伝達」という現象に着目し、ハイデガーの『存在と時間』（1927年）の議論を手がかりにその存在論的構造を見ていく。そして「伝達」のうちにある「公共的な」責任回避構造から、「見たくないものは見ない」ことに関する問題を検討する。

Key words : 伝達, 公共性, 「ひと」, 想定内・外, 責任

## はじめに

私たちが「認知しない（見聞きしない）もの」について、あたかも「ないもの」として解釈することはしばしば起こる。「見えない」だけで「ある」にもかかわらず、「ない」ことのように扱われると、それについて関わりもないし、配慮することもできない。

しかしそのなかには、「見たいもの（聞きたいもの）だけを見る（聞く）」と同時に「見たくないもの（聞きたくないもの）は見えない（聞こえない）」ことによって、その存在が無視された事柄・事象もある。そして、それらが無視した結果、甚大な被害が生じ、あるいは被害が継続されていくのである。重大な災害や事件、事故があったとき、それに関して関心を持ち、倫理的行動へといたるには、まずそれを私たちが認知する必要があるのだが、当事者の声が聞こえない場合（当事者自身が「沈黙」する場合もあるが）、その声は外部へと届かぬまま、問題は後手にまわる。

---

※ 淑徳大学兼任講師

災害などに「関心を持つ」ことが被災者や被害者への「行動」につながるのならば、いかにその声を聴くことができるかが重要であるが、ここにたちはだかるのが「見たくない（聞きたくない）ものは見えない（聞こえない）」、「考えたくないことは考えない」という事態である。

ただ、このような事態に対して「個々が自主的、自律的に考えるべきである」と簡単に結論づけられるわけではない。「考えねばならない〈にもかかわらず〉考えない」という事態には、いわば存在論的な（人間の存在についての）構造が横たわっていると思われるからである。本稿は以上のことを踏まえ、まずは「どのようにふるまうか」という倫理的行動の前提となる、存在を認識するうえでの必要な情報の「伝達」について、ハイデガーの『存在と時間』（1927年）の議論を手がかりに見ていく。そこで「伝達」のうちにある「公共的な」責任回避構造に着目し、様々な「見たくないものは見ない」ことの構造および問題を検討したい<sup>1)</sup>。

## I ハイデガーによる「伝達」の特徴

何事かを伝えるとき、「何を、どのように伝えるか」は重要である。それが一言では表現しえないもの、予測不可能なものであればなおさらである。「多」なる事柄を「一」なる言葉に集約し、それを他者に伝えるさい、他者ごとに様々な「多（他）」なる解釈が生じてしまい、こうした伝達やコミュニケーションによってお互いに誤解が生じ、それが認識や行動に影響を及ぼしていくことはしばしばである。ハイデガーによる日常における「伝達」の分析を見ると、その構造が明らかになるだろう。

「伝達」ということでイメージされやすいのは、ある見解や願望といった体験を「一方の主観の内面を他方の主観の内面に運び込む」ことであるが、ハイデガーはそうした見解を退ける。つまり、一方がもつ「伝えたい事柄やイメージ」を他方に対してありのままコピーするかのごとく伝えるのではなく、人間一現存在（Dasein）がある状態の気分や理解したことを他者と「共に分かちあう（mit-teilen）」こと、それが「伝達（Mitteilung）」なのである（SZ, 162）。また、みずからの伝えたい内容が本来的に理解されるかたちでシェアされ、共有されるためには、「語る」ことのみならず、「聞く」こと、「沈黙する」ことも重要である（SZ, 163ff.）。こうして互いに語り、聞き、応答しあうことで自他相互の存在理解が可能となり、他者との「相互共存在」の分節化が構成される。

ただし、ハイデガーが「伝達」の分析で見取ったのは、この日常的な「伝達」にひそむ存在論的構造、言い換えれば、日常に生きている限りは避けては通れない構造である。

彼によれば、語られた内容は日常的には「空談（おしゃべり）」というかたちで伝達されていく。だが「空談」というかたちで他者へと語る（話す・書く）なかで、本来伝達されるべき「語りの糸口とされた存在者への理解」までにはいたらない。むしろ、伝達内容を共有する世間の人々は通常、匿名で不特定の、他者に流されやすい「ひと（das Man）」（vgl. SZ, 128）的な在り方をし

ているので、彼らは伝達のさいに表面上の「語られた内容」だけを注視したり、聞いたりするのみである。そしてその内容は「誰もがそう解釈しているだろう」と、平均的で表面的な理解で解釈されてしまい、そうして理解された内容や解釈がいつしか「権威あるもの」として、さらに語り広め、語りまねられもするのである（SZ, 168）。さらに「ひと」は、そうした伝達内容から興味あるものしか追い求めず、そうした「好奇心」につられて、他者や周囲の環境・道具に気を取られ、世界に没入していく（「頹落」していく）ので、自分の本来の在り方にふだんは気遣わない。

ハイデガーからすれば、こうした頹落傾向が人間の存在のいわば本質であるので、こうした頹落傾向に陥らない人間など存在しない。「語る存在者」としての人間にとって、「語ること」、「聴くこと」、（それらのためにも）「沈黙すること」は重要である。しかし、他者に対して、腹藏なく語り、言明する「伝達」の構造のなかに、日常のうちに頹落する非本来的な在り方、非人称的な「ひと」の在り方が内包されているのである。語られた内容は伝達されると同時に、間違っただかちで伝わり、あたかも伝言ゲームかのように、その内容が伝える側の意図から離れて、曲解されて、「真意」とされたまま共有されることは、私たちの日常の様態なのである。そのさい、こうした人間の本質に気づき、伝達内容の真意を問うべきかもしれないのだが、なかなかそうはいかない。それは、日常的な存在である「ひと」の「公共性（Öffentlichkeit）」が強い影響力を持っているからである。

この「公共性」は、（普段イメージするような）理性的な議論や批判的機能が保障される場を特徴づける公共性ではなく、そうした合理的議論とは反対の、いわば「同調圧力」によって形成された「公共性」であり、日常のこうした「公共的」世界がさしあたり、現存在が頹落した在り方—「ひと」—をとる「場」とされる<sup>2)</sup>。「ひと」とは他者たちの「支配」のもとにある状態にありながら、誰でも「代理」することができる非人称的「主体」であり、この誰でもありうるのだが、実は特定の誰かとして名指すことができない「ひと」において、誰もが誰かと比較し、互いに自他の違いや距離を不断に気にし、誰かと同じようにふるまい、判断する。その一方で、例外なるものを監視していき、人々の平板化が強められる。こうして、「ひと」のうちに人間は「公共的」世界のなかで自己の存在を「喪失」していく。「さしあたって世界と現存在についてのあらゆる解釈を規制し、何ごとにつけ自分が正しいと称して譲らない」のも、「水準や真贋の違い一切に鈍感なせいで〈事柄へ〉深入りしないこと」を「ひと」に要請するのも、「すべてを曇らせ、それでいて、そのように覆い隠したものを、周知のもの、誰にでも親しめるものだと、偽っている」のも「公共性」によるからであり（SZ, 127）、「伝達」に潜む頹落傾向はそうした公共的「ひと」の特徴によるものなのである。伝達内容の伝達・共有が続くなかで内容理解が表面上の理解に変容してしまうのは、ハイデガーからすれば、私たち人間のいわば本質なのである。

さらに、「伝達」にみられる「公共的な〈ひと〉」の力は、人間からそのつど責任を取りのぞきもする。つまり、何ごとにつけいともたやすく責任を背負い込むが、同時に「誰ひとりとして責任をとる必要がない、誰のせいでもない」と、他者に「迎合」するのが「ひと」である。たとえ

ば「空気を読む」ことによって何か被害が生じて、「済んでしまえば〈ひと〉のせい〈だった〉」、「〈誰〉のせいでもなかった」と責任のなすりつけ合いが起こるのは、こうした「ひと」における「存在免責 (Seinsentlastung)」(vgl. SZ, 127f.) に他ならない。

なお、ハイデガーの「ひと」の形成は「伝達」や「空気を読む」ことのみならず、普段の生活そのものに起因する。とくに「伝達」の点からいえば、「公共的な交通機関や報道機関」(SZ, 126)を他者たちと共に、他者たちと「同じように」使用し、利用する(共有・共用する)時点で、すでに他者たちが相互にその差異や際立ちを消し去りあう結果を生み出す。生活している以上、存在への責任回避が私たちには伴っているのである。

ここで重要なのは、そうした「ひと」による責任回避は、私たちの日常が開示されたものに他ならないという点である。ハイデガーからすれば、「語られた内容そのものだけしかすでに聞いていない」、または「ひとが言うから、実際そうなのだ」と、周囲の道具(事物・環境)や他者に気遣うあまり「空談」を鵜呑みにし、みずからの好奇心に向かって無批判的に夢中となるのも、伝達における恣意的な選択や曲解も、そして「責任」からの逃避も、私たちの日常の必然である。ただし、ハイデガーによれば「それで居直ってはいけない」と、「ひと」的自己から本来的自己への転換あるいはその自覚に向かおうとすることもまた要請されるのではあるが。

ここまで「伝達」と、それによって形成される公共的「ひと」について概観してきたが、ハイデガーが見て取ったように、伝達における同調圧力の解釈および責任回避は実際に日常で起こっている。たとえばインターネットはどうだろうか。メディアに関する議論は後述するが、現在は既存の「報道機関」(テレビや新聞など)よりも、「マスコミ(報道機関)に惑わされるな」とばかりにインターネットを利用する者も増えているが、そうした利用者はどうであろうか。確かに、双方向的に情報を送受信でき、情報を取捨選択しつつ自発的に情報にアクセスできる点は、既存のメディアと違うであろうし、「同調圧力」への抵抗も可能のように思われる。しかしその場合でも、私たちは「語る存在者」である以上、ハイデガーのいう「伝達」の特徴を抜け出したわけではない。インターネット利用者自身が、ネットの膨大な情報の渦に巻き込まれ、「自分は世間(「ひと」とは違う)」と思いつつもネットの多数派の声に支配されうるし、みずからをいっそう閉鎖的な空間に追い込んでいく。社会の報道や伝達による、「見たくない(聞きたくない)ものは見えない(聞こえない)」ことで生じる倫理的問題は、ハイデガーのいう公共的「ひと」の問題として、現代のあらゆる日常生活の形態にはびこっているのである。

本章では「伝達」について、それが人間の存在に本質的である一方、頹落した現存在の日常性を開示する可能性をもつことを見てきた。また、それゆえに「伝達」における問題は主体的な態度変更で解決できるほど簡単ではないわけではないことも見てきた。次章では具体的な場を舞台に、いかにそうした「伝達」に応答するか、また、責任回避の構造によって考えるのをやめてしまうとうなるのか考えたい。これは、伝達されたもののみが「解釈」され、その「解釈」が権威的になればなるほど、それ以外の解釈が入り込む余地はなく、ましてや「語られないもの」は

「存在しない」かのごとく扱われることに関する問題である。

## Ⅱ 「内と外」

### 1. 意識上の「内と外」

私たちにおける伝達とそれに伴う責任回避について、エラードはそれを意識上の空間認知の問題としてとらえ、環境問題への希薄さを例に次のように述べている。

しかし「環境」という言葉を聞いて私たちが思い浮かべるのは、森林や草原や山脈といった自然環境であるのがふつうだ。私たちの頭の中では、そうした外の空間と、家や職場や工場といった内の空間に大きなへだたりがある。これがどれほど状況が切迫しているのかを理解する妨げになっている。駐車場で車の窓からごみを捨てた男を含め、私たちは環境問題を手つかずの自然がある「外」の世界としてとらえ、私たちがほとんどの時間を過ごしている「内」の世界とは何の関係もないようにふるまう。空間が壁で完全に切り離されているため、暖かくて安全なりビングルームから、ドアのすぐ外を流れる川の汚染について考えるのは難しいのだ。

私たちがちがうタイプの空間（内と外、都市部と田舎）を結びつけることができないのは、人間の頭のつくりと、人間と空間の関わりかたに原因があると、私は考えている<sup>3)</sup>。

ここで注目したいのは、引用中の「ゴミを捨てた男」が意識してゴミを捨てたわけではなく、「無意識に」、「何気なく」捨てた点である。この男にはその行為が最終的に自然環境の破壊へとつながり、ひいては自身に跳ね返ってくるなど考えていない。その行為が日常の習慣・クセとなるとなれば彼は考えていないであろう<sup>4)</sup>。このように私たちのなかで公共空間に対する意識や認識が消失する可能性はいくらでもある。「見たくないもの（聞きたくないもの）は見えない（聞こえない）」状態が日常に潜むことの具体的事例を、エラードは示しているのである。

またエラードは、意識のなかに「内部」と「外部」の隔たりが生じると、自分の生活および興味関心の「外部」にはほとんど触れなくなることを見て取っている。ゴミを捨てる場合のように、自分の手から離れたものは、いつか「処理される」と考えるが、それは「見えなくなれば忘れてしまう」という可能性を広げる結果となる。エラードからすれば、ゴミのポイ捨てのような倫理的ではない行動が可能なのは、まさに意識のなかに内と外の隔たりができてからであり、環境問題や事件について「〈ひと〉ごと」になるのはこうした意識上の分断によるものである。言い換えれば、「忘れ去られた存在」に対しては責任を負う必要がない。

しかし問題は、プライベートな「内部」とそれ以外の「外部」とに分断された途端、「世界と関係するからこそみずからの存在も可能となる」事実も忘却されることである。こうして見えな

なくなったものは、自分の存在に関係するにもかかわらず、関係ないものかのごとくとして忘却されるのである<sup>5)</sup>。

## 2. 「想定外」という言葉

先述のように「自然破壊」が外部に追いやられるのは、ひとつには「地球環境」という、全体がつかみにくい大規模な対象だからかもしれない。だが、「見えない」ことは「忘れる」ことにつながり、「なかった」ことになり、それゆえ「愛せない」ことにもなりかねない。エラードが述べているようなこうした意識上の分断は、現実には巨大事故の要因として指摘されていることでもある。

たとえば、福島第一原発事故では「想定外」という言葉がたびたび飛び交ったが、「見える（伝えられる）ものだけ見る・聞く」、その反対に「見えない（伝えられない）ものは見ない・聞かない」という姿勢が「想定外」という「虚構」をつくり、巨大事故につながった。安全におけるこうした「想定外」の弊害は、福島第一原発事故の政府事故調査委員会（政府事故調）でも指摘されたことである。

ところで「想定外」とはどのような事態なのか。政府事故調の委員であった柳田邦男によれば、「想定外」のケースは、「A）本当の想定できなかったケース」、「B）ある程度想定できたが、データが不確かだったり、確率が低いと見られたりしたために、除外されたケース」、「C）発生が予測されたが、その事態に対する対策に本気で取り組むと、設計が大がかりになり投資額が巨大になるので、そんなことは当面起こらないだろうと楽観論を掲げて、想定の上限を線引きしてしまったケース」、以上の3つが考えられる。だが、「想定外」と言われるケースの多くはBかC、およびその中間であり、したがって事故が起こる可能性の「想定不足」が原発事故の原因であると柳田は述べ、「想定外」という「虚構」を指摘している<sup>6)</sup>。

政府事故調の委員長であった畑村洋太郎も、想定内と想定外の間には横たわる深淵を指摘しているように<sup>7)</sup>、想定する事柄を確定しようと線引きすると、想定内にある事柄には十分考え、対策をとるが、「想定外」とした事柄については、想定外とされた瞬間に思考停止あるいは思考放棄状態となってしまう。そして「想定外であった」と語ることで「想定外とみなされるもの」による事故として、責任を回避していく。柳田によれば、その思考停止・放棄こそ、事故後の対策が後手に回ることとなり、そのために被害を受けた住民の避難対策を放棄することになった原因である。確かに「想定内」とされる事柄のひとつとして原発の耐震設計は行ったのだろうが、「想定外」とされた事柄の事後対策は「神頼み」になってしまったのである<sup>8)</sup>。

畑村も述べるように、「想定」そのものは必要不可欠である。何かを企画、計画するなど「考えをつくる」とき、まず自分の考える範囲を決めるが、この境界を決め、考えの枠をつくるという「想定」をしないと、考えがどんどん広がって散漫になるだけで、企画や計画を具体的な形にすることができないからである。しかし、この想定や計画の営みそれ自体は実は難しく、特に科学技術

の分野においては、さまざまな「制約条件」（リスク、時間、コストなど）によって想定は変わってくる<sup>9)</sup>。

たしかに「想定」が必要不可欠であること、そしてそれは置かれた条件によって想定範囲が変わること、「想定」そのものが難しいことは科学技術の分野だけにとどまるものではない。「想定」は人間が生きる限り必要不可欠であるし、これはエラーの指摘する意識上の境界設定にも言えることである。

しかしながら、原発事故での問題は、「想定できたのに想定しなかった」という点である。たとえば巨大地震の起こる確率や津波が襲ったさいの津波の高さなどは過去の経験や様々なデータから想定できたにも関わらず、事故の引き金となった実際の高さよりも、津波の高さを低く想定した<sup>10)</sup>。

「見たくないものは見えない」、「聞きたくないものは聞こえない」、ゆえに「考えたくないものは考えない」結果、巨大な事故につながった。したがって「想定外」なるものは「起こらない」のではなく「起こりうる」し、そうした「想像性」の「欠如」が、同時に責任への「欠如」にもなる。まさに、これはハイデガーの「ひと」的在り方と重なっているのではなからうか。そして、ただそれが直接の危害につながるというわけではなくとも、こうした恣意的ともいえる欠如（「見たくても見えない」のではなく、「見たくないから見えない」）は、情報伝達の場面など、私たちの日常に潜んでいるのである。

原発事故などの技術事故において、専門家に「未曾有」や「想定外」はあってはならないことであり、その意味では、企業や国が「想定」を誤り、周囲（ステイクホルダーや地域住民などの公衆）への情報公開や避難対策を怠れば、その倫理的責任を問われ、改善を図るのが一般的である。本章では、それにもかかわらず、それとは反対に「責任回避」へと向かう傾向があるという事態について見てきた。しかし、ハイデガーの「伝達」における「ひと」的な在り方を見るに、倫理的責任の回避は日常生活を営む私たちに存在論的な構造として潜んでいることを見逃すべきではない。そして、その構造はメディアと接していくなかでも明らかとなる。

### Ⅲ メディアにおける、「見ること」の恐れと責任回避

ハイデガーのいう「存在免責」は、「語られた内容そのものだけしかすでに聞いていない」、または「ひとが言うから、実際そうなのだ」となることで、自分の責任（もっといえば自分の存在の「重荷」ともいうべき）を回避しようとすることを指すが、それによって「伝達された言葉」の真意をくみ取ることなく、「聞きたいものだけを聞く」、言葉として現れないものを「聞かない」、「見ない」、しかも他者という「ひと」に解釈を任せているので「考えない」（それによって自分の存在について気遣おうとしない）事態が生じるのである。確かに、『存在と時間』においても論じられるように、そうした「ひと」の在り方は「不安」に襲われることで瞬間的ながらも

瓦解し、本来的な自己（「死へと関わる自己」への自覚）に向かうのではあるが、日常では、私たちは「ひと」における仮初めの「居心地の良さ」を求めてしまうのである。和田伸一郎が「見ること」の「恐れ」をテレビの視聴者（および送り手のメディア）に見出したのはこの点と密接に関係する。

和田はハイデガールの存在論を踏まえて、「伝達」される側であるテレビ視聴者の「存在」に着目し、メディアをめぐる無関心や無責任、無批判といった事態について次のように分析をおこなっている。それによると、私たちがテレビで悲惨な戦争や事件について「リアルタイム」映像を視聴するさい、それでも当事者への共感が惹起されるどころか「無関心」でいられるのは、それが「リアルタイム」であるゆえに極めて（時間的に）「近い」出来事として現れるからである。それは報道写真や録画済みの「遅延された」映像のように、内容が過去の出来事ゆえに見る者とのあいだに「距離」が生まれ、その距離の間合いや余裕が倫理的思考や出来事に対する関心・批判を見る者に惹起するのとは対照的である。リアルタイム映像の視聴者は、考える余裕すらなく、それゆえ関心が起きづらい傾向にあるわけである。また、映像を見ても視聴者が「無責任」でいられるのは、「リアルタイム」映像があまりにも「近い」ので、もし「ありのまま」を見せつけられれば、「そこに映っている人々がこれからどうなるのか分からない」など、彼らの存在のゆくえに視聴者は「責任」を感じずにはいられないために（「遅延された」映像や写真の場合、それを見ている時点で、映っている人々がどうなったか、その顛末がすでに決まっているために、見る者が感じる「責任」は軽くなる）、その「責任」の重さに伴う苦痛の感情を回避しようと「無責任」や「無関心」を装い、ひいてはそうした事柄を「見ること」を恐れるからである<sup>11)</sup>。

戦争や事件のリアルタイム映像は、残酷な映像の現場と、それを視聴する気楽で、居心地の良い「お茶の間」とのギャップをも生み出し、それが視聴者に「映像を介して〈いま現に〉関わっている自分自身に対する或る種の歯がゆさの感情」<sup>12)</sup>、視聴者自身の「存在」の無力さからくる「挫折感」、自分を責める感覚を引き起こさせることにもなる。「見ることの恐れ」はそうした事態に由来する。さらにメディアはその「恐れ」にいわば付度するかのように、ありのままを見せることはしなくなるため、視聴者はそうした挫折感などにとらわれないよう、そして「お茶の間」という居心地の良さを維持するためにも、「何かが見せられていないということを知りつつ、画面を見ている」<sup>13)</sup> という、メディアと視聴者の間で親密かつ共犯的な相互補完性が生まれるのである。和田は、こうした「見たくないものは見ない」ということへの共犯的な相互補完性は、視聴者のみならず、伝えるメディア側も「見ること」を恐れているからだと指摘している。たとえばアナウンサーが、「遠く」から事故現場を撮影している中継の上に、実況という「おしゃべり」をのせたり、コメンテーターがコメントという言葉で埋め尽くそうとしたりするのは、彼ら自身が現場を「近くから見ることへの恐れ」のあらわれである（そこには事故現場の撮影それ自体への後ろめたさも含まれている）<sup>14)</sup>。そして実況やコメントという「おしゃべり」で「恐れ」を取り繕い、視聴者にもそのために「おしゃべり」へと意識を向けさせることで、視聴者自身も



「見ている」事柄そのものについて「思考すること」を停止させることになる。「おしゃべり」によって、ありのままの過酷な状況を「見ること」の倫理的な耐えきれなさが紛らわされ、たとえ画面の向こうが過酷な状況を映し出しているとしても、送り手であるメディアの規制や報道方法によって、「ここはお茶の間である」という「安心できる」居心地の良さを視聴者は提供され続けられるのである<sup>15)</sup>。こうして、メディアと視聴者双方に「責任回避」あるいは関心を向けることからの回避が生じるのである。

リアルタイム映像における「距離の取りようのなさ」とそれに伴う「恐れ」ゆえに、視聴者やメディアが「無関心」や「無責任」的態度をとるとする和田の分析を踏まえると、視聴者の期待するような、恐れをなるべく抱かず、話題が生活へ直接に影響しないような（意識の外に置きやすい）コンテンツ、あるいは世間が見たいと思っているコンテンツをメディアが提供し、それを視聴者も漠然と期待している構造は、「見たい（聞きたい）ものだけ見る（聞く）」ことによる、（ハイデガーも「伝達」の分析においてみてとった）自己存在への希薄さや責任回避の傾向が現代社会のメディア空間においてより深刻となっていることを示しているのかもしれない。

また、メディアや視聴者は自主的な営みによってではなく、テレビを取り巻く空間の構造そのものによって、「見ること」を互いに恐れている点は注目すべきである。こうして「見たくないものは見ない」、「聞きたくないものは聞かない」ことを双方が保っていると、世界への無関心、そしてやがては自らの存在の寄る辺なさに対する無関心にもつながっていく。テレビとインターネットでは伝達の担い手の関係性が違うとともに、コンテンツの可能的「多様性」にも差があるとはいえ、インターネット社会の到来は、メディアの視聴空間が美術館や展覧会などの公共空間から「お茶の間」へ、そしてより閉鎖的な「個室」へと移っていくのにあわせて、視聴者をますます孤立させ、その者が持つ関心と無関心との溝をますます深くさせる可能性を広げていくであろう<sup>16)</sup>。

## おわりに

ここまでハイデガーの「伝達」分析からはじめ、伝達にともなう現代的状況について見てきた。ハイデガーが存在論的に分析した「伝達」構造は、今日でも我々の日常生活にあてはまるものであり、そこで様々な問題を生み出している。そのなかでも大きいのは「責任回避」である。

伝達される言葉のみを見聞きし、いつの間にか他者（「ひと」）と同じように解釈し（あるいはそれに合わせるかのように批判し）、そうした内容をまた別の他者と共有する。それがいつしか「見たくないものは見ない」、「聞きたくないものは聞かない」、その結果「考えたくないことは考えない」となり、責任が回避される。しかしそれが人間のいわば本質だとしても、災害や事故では、そうした思考停止や思考放棄によってネガティブな結果が引き起こされることを「仕方がない」と済ませるわけにはいかない。私たちはそういうことも念頭に、それでも、見るべきものは

見、聞くべきものは聞き、考えねばならないものは考えねばならないのである。しかし同時に、問題が伝達する側や伝達される側の自主性によって克服されるほど単純ではない。伝達を共有する者たちに対してそうした「見えないもの」を作り出す（認識）空間の構造、そして私たちの存在構造それ自体が様々な倫理的問題をつくりだすからである。だから、内（見聞きする・ありえる・考えられる事柄）と外（見聞きしたくない・ありえない・考えられない事柄）とに分けるのは、個々の恣意性によるものとは言いきれない。しかしながら、それが特定の視点の固定化や安心感の獲得（居心地のよさの維持）につながり、「思考不能」による（あるいは「想定外」と称する）責任回避（あるいは保身）につながっていることも事実である。だからこそ、それでもなお、私たちは「見たくない・聞きたくない」モノ・コトに向き合うことが必要となるのである。畑村は、事故や災害の教訓、あるいは過去の失敗から学ぶことの重要性を説くさい、「忘れる」ことが人間の本质であり、それが少なからず「(あるのに) なかったモノ・コト」にすることも指摘している。「忘れる」という特質があることを前提にしたうえで、責任回避の傾向から脱するためには伝承や学習が重要だと畑村が説くのは、極めて示唆的である<sup>17)</sup>。

「見えないもの（聞こえないもの）」は「ない」、「ありえない」のではなく、むしろ「ありうる」のだ— 倫理的問題への関心の発露は、そうした（「想定外を想定する」ごとく）事態を見通すことから始まるといってよい。これは専門家だけの話だけではない。「見えないもの」に対してどれだけ想像力を働かせるか、またどれだけ「ニーズ」を、つまり人々の生活に必要とする事柄をどのように把握し、答えていくか、またそのためにもどこまで情報を公開し、その透明性を高めるか。こうした問題関心は人びとが共に存在する限り、またお互いの存在への責任を考へるうえで、日常生活を生きる私たちに必要であろう。

## 【注】

本文および注において、ハイデガーのテキストの引用・参照箇所については、下記の略記号の後に、頁数を併記して示す。

SZ: *Sein und Zeit*, 17. Aufl., Tübingen, 1993.

- 1) 「伝達」については、西洋思想史のなかでは、対人関係のみならず、「神との関係」において問われてきたが（それは「他者」についての問題でもそうである）、本稿ではハイデガーの実存論的分析に依拠し、対人関係における伝達に絞って論じる。
- 2) 20世紀後半になるとハーバーマースらにより、公衆による合理的議論が可能な場・空間を特徴づける元来の公共性の意味が回復され、現在に至る。また、齋藤純一はこの（現代の）公共性を「閉鎖性と同質性を求めない共同性、排除と同化に抗する連帯」としている（ただし、彼も指摘するように、現代においても異質な他者を排除するようなハイデガー的「公共性」へと転換する可能性を秘めている）。齋藤は現代における公共性の特徴を次の3つにまとめている。

1) 国家や地方自治体が法や政策などに基づいて行う活動のような、国家に関係する「公的な（official）」もの。

2) 共通の利益（公共福祉）の追求・共有財産（公共財）の維持管理・共有する規範（常識）の創出・共通の関心事などの伝播に見られるような、特定の誰かにはなく、すべての人びとに関係する「共通の（common）」もの。

3) 誰もがアクセスすることを拒まれない空間や情報のように、誰に対しても「開かれている（open）」という意味。

なお、この3つの特徴は「互いに抗争する関係」にもある（齋藤純一『公共性』、岩波書店、2000年、viii頁以下）。

- 3) C・エラード『イマココ 渡り鳥からグーグル・アースまで、空間認知の科学』、渡会圭子訳、早川書房、2010年、267頁。
- 4) 「見えなく」なるのは、「外部」に追いやられた「関係ないもの」とは限らない。日頃から繰り返しおこなうことによって身につく慣習や道徳などの社会規範や、自分の日頃の行動やクセについて、私たちは日ごろ意識することはない。それは「道具」がその役割を果たせば果たすほどその「存在」には意識が向けられないことにも似ている。意識が向くのはあるべきはずの道具がない、道具が壊れたなど、普段なら円滑に進んでいた有意義な連関に障害が発生したときであろう。こうした有意義な連関がスムーズであればあるほど、連関はそれとして自覚されず、「見えなくなる」。当たり前すぎて「見えない」という状況は、それはそれで状況が問題なく進行しているということであり、問題はないように見えるのだが、「見えなく」なったらなったら問題もまた生じうるのである。
- 5) エラード、同書、266頁。
- 6) 柳田邦男『想定外』の罨 大震災と原発』文藝春秋、2011年、19頁以下。また「想定外」と並んで「未曾有」という言葉も責任回避の言葉であると指摘される（畑村洋太郎、『未曾有と想定外 東日本大震災に学ぶ』、講談社現代新書、2011年、14-15頁）。
- 7) 畑村洋太郎、安部誠治、淵上正朗『福島原発事故はなぜ起こったか 政府事故調核心解説』講談社、2013年、180頁以下参照。
- 8) 柳田、同書、34頁。
- 9) 畑村洋太郎『未曾有と想定外』、93頁以下。
- 10) 貞観地震（867年）による大津波の記録が残っているにもかかわらず、その記憶が忘れ去られ、また振り返られなかったことが原発事故につながっている（同書、16頁以下）。
- 11) 和田伸一郎『メディアと倫理 画面は慈悲なき世界を救済できるか』NTT出版、2006年、17頁参照。
- 12) 同書、25頁。
- 13) 同書、30頁。
- 14) 同書、34頁以下。
- 15) また和田は、テレビと「お茶の間」との閉じた相互補完性（外部を排除した）へと逃げ込む理由は、「〈実存論的〉に解釈すれば……（中略）……気楽でいられる〈お茶の間〉で、呆けて、だらけている自分が、テレビ画面へと現われてくる遠く離れた場所で起こっている悲惨な出来事によって責められたくないからである」とも指摘する（同書、40頁）。
- 16) テレビの「お茶の間」からインターネットの「個室」への変容や、インターネット社会に関する和田の分析は詳細に取り上げることはできないが、インターネット利用者にも責任回避の傾向はあるように思われる。確かに、既存の「報道機関」（テレビや新聞など）よりも、「マスコミ（報道機関）に惑わされるな」とばかりにネットを利用する者も増えているように見えるし、確かに、双方向的に情報を送受信でき、情報を取捨選択しつつ自発的に情報にアクセスできる点は、既存のメディアとの違いであり、「同調圧力」への抵抗もそれゆえ可能のように思われる。しかしその場合でも、私たちは「語る存在者」である

以上、ハイデガーのいう「伝達」の特徴を抜き出したわけではない。また、インターネット利用者自身が、ネットの膨大な情報の渦に巻き込まれ、「自分は世間（「ひと」）とは違う」と思いつつもネットの多数派の声に支配されうるし、いっそう閉鎖的空間に追い込まれることもある。

- 17) 「伝承」についての重要性はむしろハイデガーも見取っており (vgl. SZ, 369), その点の議論については別の機会に論じることとしたいが、津波における「てんでんこ」の伝承とその効果にみられるように、過去の歴史や失敗の学びとその伝承、それに基づく日ごろからの習慣・訓練の重要性は、災害時において改めて明らかとなった。

また失敗からの学習に関して、畑村は「三現」のススメを説いている。「三現」とは「現地」、「現物」、「現人」の3つを指す。つまり「現地」に直接行って状況を把握し、「現物」を見たり触ったりし、「現地の人々（現人）」と実際に話すなかで現場の本当の状況を知り、調査していけば、今後失敗を活かすことができるようになるのである（『「想定外」を想定せよ！ 失敗学からの提言』NHK出版, 2011年, 145頁）。余談であるが、2016年から3年にわたり、筆者も引率者のひとりとして参加した淑徳大学の正課外授業「現代人の生活倫理 福島スタディツアー」は、科学技術の倫理的問題を考えるために福島原発事故の周辺地域を訪れ、「想定外」とされて「見えなくなった」ことで現地がどうなったのかを知るために（被災者たちの故郷喪失の問題など）、「現地に行かないと見えないもの」を見に行くことに重点を置いた。その点では、「三現」のススメの実践的取り組みとすることができよう。

なお、「伝達」による曲解作用にともなう「排除」（想定外）という傾向についてより詳細に検討したいが、この「排除」の問題についても、別の機会で改めて論じることとしたい。

## 【文献】

- Ellard, Colin. (=2010, 渡会圭子訳『イマココ 渡り鳥からグーグル・アースまで, 空間認知の科学』早川書房.)
- 畑村洋太郎 (2011) 『「想定外」を想定せよ！ 失敗学からの提言』NHK出版。
- 畑村洋太郎 (2011) 『未曾有と想定外 東日本大震災に学ぶ』講談社現代新書。
- 畑村洋太郎, 安部誠治, 淵上正朗 (2013) 『福島原発事故はなぜ起こったか 政府事故調核心解説』講談社。
- Heidegger, M. (1993) *Sein und Zeit*, 17. Aufl., Tübingen.
- 齋藤純一 (2000) 『公共性』岩波書店。
- 和田伸一郎 (2006) 『メディアと倫理 画面は慈悲なき世界を救済できるか』NTT出版。
- 柳田邦男 (2011) 『「想定外」の罫 大震災と原発』文藝春秋。